

2018年度 FD活動評価点検報告書

1. 中部大学のFD活動組織について

本学における教育活動・改善に向けた教員の資質向上策としてのFD (Faculty Development) 活動は、学長を委員長とした全学FD委員会のもと、各学部FD委員会および各学科組織があり、全学体制のFD活動ワーキングが中心となって種々の検討を行っている。また、教育活動顕彰審査選考委員会やFD活動評価点検委員会が図1のように組織されており、FD活動の内容について評価できる体制が整っている。なお、全学FD委員会および学部FD委員会は、2007年度まで本学に設置されていたFD推進委員会、学部でのFDに関する諸活動を2008年度より新しく改変した組織である。また、大学教育研究センター（教員3人、事務員4人で構成）が主管部署として、FD活動の推進、支援を行っている。

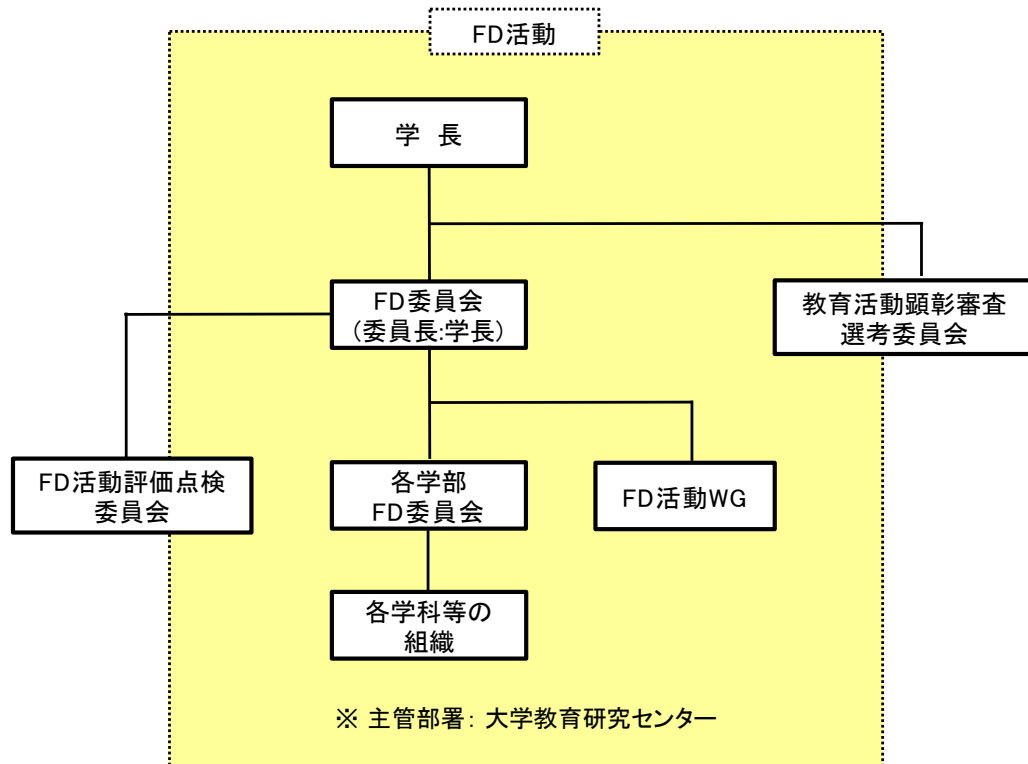


図1 中部大学のFD活動組織図

FD委員会 : 本学のFD活動全般について、学長を委員長として審議、検討をする。

FD活動WG : FD委員会の専門委員会として、学部代表のFD委員を中心に主に全学的な活動を企画する。

FD活動評価点検委員会 : 本学のFD活動全般について、第三者的な立場にたって評価点検をする。

教育活動顕彰審査選考委員会 : 教育活動顕彰制度に係る重要事項、および受賞者の審査、選考する。

2. 本学の FD 活動評価点検の対象

本学の FD 活動は、次の表に示すように 3 つの観点から分けられる。広義の FD 活動の目的となりうる「カリキュラム改善」や「組織の整備・改革」に関する諸活動は、FD 委員会の所掌事項でないため、これらを目的とした活動（網掛け部）は、本報告書の内容には含めていない。なお、授業担当者のみの授業改善の活動は、「教育活動重点目標・自己評価シート」と「学生による授業評価、教員による授業自己評価」によって実施され、後者は学内向けに HP 上で公開されている。

表 1 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動

【※1】 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動（網掛け項目は除外する項目を表す）

| 目的別にみた FD 活動 | 対象別にみた FD 活動 | 形式別にみた FD 活動 |
|---------------------|--------------|-------------------|
| 1) 授業・教授法の改善 | 1) 全学対象 | 1) 会議 |
| 2) 教員の資質向上（研究交流を含む） | 2) 学部・研究科対象 | 2) 研修会・懇談会 |
| 3) FD 活動の企画・運営など | 3) 学科・教育科対象 | 3) 講演・報告会 |
| カリキュラム改善 | (*1) 非常勤を含む | 4) ワークショップ・セミナー |
| 組織の整備・改革 | (*1) 学生を含む | 5) 制度・システムなど (*2) |
| | 授業担当者 | |

(*1)：対象別 1)～3) で非常勤を含む場合、学生を含む場合

(*2)：授業評価システム、授業改善アンケートの制度の運用やシステムの構築、および出版などが該当

3. 2018 年度の FD 活動の重点目標

FD 活動の重点目標として 2008 年度より 5 年間を目安とした『魅力ある授業づくり』は、2013 年度以降も重点目標とすることが 2012 年度の FD 委員会で決定され、以下の考え方をもとに 2018 年度も継続して FD 活動を進めてきた。

『魅力ある授業づくり』は、学生と教員が協同して行うものです。

魅力ある授業・・・（学生にとって）興味を持って聴ける授業、将来において役立つ授業
 （教員にとって）学生の成長を実感できる授業、学生から感化を受ける授業
 授業づくり・・・（学生が目指す）自主的に学ぶ態度、知識・技術の修得
 （教員が目指す）授業改善、授業スキルアップ
 （学生と教員が目指す）双方向のコミュニケーション

本学では、評価点検の結果から改善を繰り返し、個人レベルから、学部学科を越えたグループ、学部学科、全学を対象に活発な FD 活動を進めてきた。こうした中、教育実践現場である各学部では、以下のような FD 活動の目標設定を行い、FD 活動に積極的に取り組んだ。

(1) 工学部・工学研究科

FD 講演会、FD フォーラム、FD カフェ等に積極的に参加し、「魅力ある授業づくり」を理

解し着実に実行する。

- 1) 「中部大学教育活動顕彰制度受賞者による講演会」を開催し、「魅力ある授業づくり」の一助とする。
- 2) 「魅力ある授業づくり」に相応しい話題を見つけ、工学部 FD 講演会として随時開催する。
- 3) 全学公開授業、授業サロン、FD カフェ、キャリアアッププログラムなど、学内で開催されるセミナー等への参加を強く推奨し、工学部内での情報共有を図り、各教員の「魅力ある授業づくり」の一助とする。
- 4) 「学生による授業評価」「教員による授業自己評価」を積極的に活用し、授業に反映させ、「魅力ある授業づくり」に努める。

(2) 経営情報学部・経営情報学研究科

- 1) 夏の教育活動顕彰制度で表彰された先生方を中心に、秋学期に表彰記念報告会を行い、全教員が情報を共有する。
- 2) 専門の講師を招待して、経営情報学部主催の FD 講演会を開き、今後の FD 活動の指針とする。
- 3) 「魅力ある授業づくり」の基礎をなす「学生による授業評価」への参加を向上させる。

(3) 国際関係学部

【授業・教授法の改善】

「実施方法の改善、留意点」などに関する情報共有を促進していく事で、本学部の「魅力ある授業づくり」に資する内容の FD 活動としていく。

- 1) ①学生と協働して創り出していくまったく新しいスタイルの授業「ハイブリッド・プロジェクト」の実施を通じて、学生の最新の学修ニーズを確認する。
②学部構成員による情報共有を推進、他の授業科目にもフィードバックすることにより、専任教員が担当する授業のより一層の質の向上を推進する。
- 2) 演習系の科目に関して、学年・学期ごとに「コーディネーター」としてまとめ役の責任者を決め、授業の事前と事後のフォローアップを担当者全員で行い、学生の学習状況の把握に努める。
- 3) 「国際関係学部 Web ポートフォリオ」を一層活用する。

【学部全般の運営についての検討】

- 1) 新学部長を交え、副学部長、学部長補佐、学科主任とともに、毎週月曜日に定期ミーティングを行い、学部の FD 活動にも効果が上がるように努める。
- 2) 国際学科の学生が初めて 3 年生に進級し、国際専門演習に取り組むとともに、就職や進学など卒業後のことが視野に入ってくるので、そうした FD 活動にも取り組む。
- 3) 学部の講演会、研究会、シンポジウムなどをできるだけ多く実施し、「授業外の学びの機会」を提供していくことで、学生のモチベーションの向上に努力する。

(4) 人文学部

1) FD 活動の目標

- ①高校と大学との連携を強化し、スムーズに大学教育への移行を図る。
- ②学生の主体性を育成するための魅力ある授業づくりの実現に向けて取り組む。
- ③学生と教員によるフィールドスタディを通じて春日井市を中心とした地域社会との連携を強化する。

2) FD 活動の計画

人文学部では各学科の特性を生かしながら学生に充実感と達成感を持たせ、国際化社会に立ち向かう「生きる力」「確かな学力」を身につけさせたい。教職をめざす学生に対しては、特に「生涯にわたって学び続ける力」および「主体的に考える力」の涵養が大切である。中学、高校での学びの延長線上に大学教育があるからである。

- ①各教員が併設校を中心とした高大連携の強化および各学科にて初年次教育を細やかに実践し、かつ独自のピアサポーター制度を活用することにより、恵那研修なども活用して1年次から自己の将来像を意識させることに取り組む。
- ②『魅力ある授業づくり』に関して、学生・教員の「授業評価」への参加を向上させ自己の授業改善に努める。
- ③従来の講義形式と学生に能動的な学修を求める参加型学習法である双方向型授業を組み合わせた授業に取り組むこと。そのため、FD 委員が自ら参加することはもとより、学部所属教員全体に本学部および本学の FD・初年次教育関連の講演会・セミナー・研修会への積極的な参加を促す。

3) FD 活動の実践に向けて

魅力ある授業づくりとは、「学生と教員が協同して行うもの」である。学生に興味を湧かせ将来役に立つ授業および教員にとって学生の成長を実感し、常に学生から感化を受ける授業を意識しながら、学生との日頃のコミュニケーションに基づき、学生にとってわかりやすい魅力ある授業づくりを推し進め、学部全教員はそれを実現できるように FD 活動を行う。

(5) 応用生物学部・応用生物学研究科

1) 応用生物学部 FD 推進委員会

○委員会の開催

定期的に委員会を開催し、2017 年度 FD 活動の評価点検、2018 年度目標達成への活動推進、2019 年度の活動目標の設定を行うほか、必要時にはメールにて審議・連絡を行う。

○学部 FD 活動目標

－FD 活動の見える化、共有化を目指す－

- ①『魅力ある授業づくり』に関して、授業改善につながる学部内の報告会、意見交換会を計画する。
- ②『魅力ある授業づくり』に関して、学生による授業評価、教員による授業評価、コメントへの回答の回収率向上を具体的目標として学部全体で継続し、取り組む。
- ③『魅力ある授業づくり』に関して、各教員の授業改善に関する重点目標、および授業評価コメント一覧の良かったところ、改善点等を参考とし、自己の授業改善に努める。

④学部 FD 講演会開催：多様化する学生を支えるため、学生サポートや授業改善に関する講演会や意見交換会を開催する。

⑤各教員は全学 FD 講演会その他の全学レベルの FD 支援活動に積極的に参加する。

2) 学科（専攻）、研究科等

学科会議、研究科委員会などを通して定期的に FD 情報（教務モニター、授業アンケートなど学生の意見、FD 講演会その他の内容等）の交換を行い、必要に応じ目標設定を行う。

(6) 生命健康科学部・生命健康科学研究科

1) [学部] 春学期中に授業検討会を行い、学部共通科目および学部専門基礎科目・学科専門科目の講義内容の紹介と基礎科目と専門科目の連携について、講義の工夫や実態などの情報共有を行う。

2) [学部] 実習科目、演習科目については可能な限りルーブリック評価の導入を目標にする。

3) [大学院] 大学院特論等において、授業評価アンケートを実施し、その結果を担当教員で共有することにより授業改善に役立てる。

4) 秋学期の終了時に、学部・研究科教員全員を対象にした FD 講演会（研修会）を計画する。

(7) 現代教育学部・教育学研究科

1) FD 活動の目標

①現代教育学部

- ・現代教育学部教員の『魅力ある授業づくり』のための力量向上
- ・現代教育学部における現状の課題についての共有
- ・新しい大学教育、特に新学習指導要領に対応したカリキュラム開発の研究

②大学院教育学研究科

- ・学部、現代教育学研究所と連携した授業改善と大学院教員の資質の向上
- ・研究交流の実施による教員組織の体制化
- ・教育モデル構築の取り組み
- ・院生への情報提供ネットワークの活性化
- ・共同研究と外部資金獲得の試み

2) FD 活動計画

①現代教育学部

以下の講演会および活動報告の実施

- ・講演 1 「中部大学の改革と現代教育学部・教育学研究科のこれから」
- ・講演 2 「教育系学部・研究科における外部資金獲得」
- ・講演 3 「(仮)名古屋市・愛知県の教育方針と現状および教員採用」
- ・「現代教育学研究所における研究プロジェクト活動報告会」

②大学院教育学研究科

- ・学部の講演 1～3 と共同開催

(8) 人間力創成総合教育センター

人間力創成総合教育センター設置の理念の下、人間力創成総合教育センターの FD 活動の継続的推進を図る。

- 1) 教育プログラム (EP) を越えた FD 活動はどのようにあるべきかについても議論し、各 EP が担当する科目の教育内容・教育理念に関して、教員間の共通理解の形成 (懇談会・研修会の実施、教材提供等による) を図る。
- 2) 魅力ある授業づくり等に向けての取り組み (授業・教授方法の改善、学生による授業評価、教員による授業自己評価の実施率を高める等) のための学外の研修会や教育関連学会への参加等の各種方法についても検討する。
- 3) 特に、教育経験の浅い教員が十分な教育経験を有する教員との交流・指導を通じた FD 活動を展開したい。
- 4) 各 EP 担当科目の魅力ある授業づくりのための改善 (授業教授方法・授業内容・体制・施設・設備等の改善・充実と学外の研究会・ワークショップへの参加によるスキルアップ等) をより一層図るとともに、科目の精選に関する考察を深める。
- 5) 文科省中教審で計画的展開が要請されている「高大連携・接続」の一環として、本学が進めている併設高校との高大連携授業では人間力創成総合教育センターが担当する部分が多く、関係教員との FD 活動を通じて、本学にとっても高校 (生) にとっても魅力ある授業づくりを検討する。

(9) 国際人間学研究科

1) FD 活動の目標

国際人間学研究科は文化系が主体をなすが、多彩な学問領域をカバーする構成員からなる。外部との接触・交流による研究・教育能力の向上、内部における相互交流による啓発・啓蒙の二方向からの FD 活動を積極的に推進し、研究科全体のレベルアップを図るように努める。

2) FD 活動の計画

対外的接触の方向では、大学外部から専門分野で活躍する専門家・識者・グループを招き、シンポジウムなどの形態をとりながら、教育・研究の向上に資する知識・情報・ノウハウの吸収に努める。前年度は、近代史の第一人者を招き、現代世界につながる近代という時代をどのようにとらえるか議論を行い、教職員、院生、学生、聴講生などの間で交流が行われた。また、シンポジウムでは、大学外から多くの市民の参加があり、政治的・社会的意義、地理空間的イメージ解釈など、多面的から議論を行うことができた。こうした成果を 2018 年度も引き継ぎながら、国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の各分野、あるいはそれらを横断的につないだ分野でのシンポジウム・講演会の実施を考えている。

3) FD 活動の実践に向けて

大学院生にとって、「魅力ある授業」とは、グローバル化していく現代世界を実感をもって受け止め、理解することができる授業である。こうした授業を実現するには、個々の教員が世界の動きを敏感に受け止め、それを教育・研究の現場で展開することが前提となる。授業は一方通行であってはならず、教員と院生が互いに議論を交わしながら内容を深めていく必要がある。2014 年度から始めた教員による研究発表会と院生による研究発表会は、魅力

ある授業づくりとも深く関係している。教員が通常の講義とは別に、他の構成員の前で自らの研究内容を紹介することは、教員全体にとって刺激になることが多い。

また、院生による研究発表会「院生の力」は修士論文の作成と重なる部分もあるが、日頃からどのようなことを考えているか、自由にその内容を披露し、意見を交換することで、自らの研究推進にとって資するところが大きい。「魅力ある授業」とは、とくに大学院の場合、教員から一方的に与える授業ではなく、院生とともに作りあげていくところに、その特徴がある。

FD 活動の重点目標である『魅力ある授業づくり』は 11 年目となる。近年、各組織独自の活動数が増加してきており、2018 年度も多数の計画が上げられている。それに伴い、共通する点として FD 活動を確実に実行していく目標が掲げられ、取り組みへの意識の高まりが見て取れる。目標や方向性も一貫してきており、開催計画も具体性を増していることから、各組織の意欲が明確に表れている。大学が主催してきた FD 活動が確実に各組織につながっていることを実感する。

4. 2018 年度の FD 活動の取り組み

4. 1 全学の取り組み

2018 年度の全学としての取り組みは、現：大学企画室高等教育推進部（旧：大学教育研究センター）HP に詳細が掲載されている（<https://www.chubu.ac.jp/FD/>）。主な取り組みは、(1) 教員による教育活動重点目標の設定および自己評価 (2) 授業改善の取り組み (3) FD フォーラム・講演会 (4) キャリアアッププログラム・FD に関する研修会等 (5) FD カフェ (6) 出版物 (7) 教育活動顕彰制度 (8) 中部大学『魅力ある授業づくり』プログラムの実施 (9) FD オンデマンド講義（全国私立大学 FD 連携フォーラム実践的 FD プログラム）の提供等である。なお、これらの現状と評価を記述する。

(1) 教員活動重点目標の設定

近年の内部質保証の観点から、教育のみならず研究、社会貢献、学内行政等についてもそれぞれの活動について評価・点検の実施、改善向上が求められており、従来の教育に係る事項に重きをおいてきたが見直しを図り、「教員活動重点目標・自己評価シート」として、大学教員としての 4 つの責務（教育・研究・社会貢献・学内行政）についても、それぞれ自己評価を実施した。2018 年度から大学設置基準上で教員と区分される助手（教育・研究の補助を主たる職務とする）も対象とし、これを機に全学部共通のレイアウトに変更となった。教員個人の FD 活動を自己点検することを主な目的として全学の助教以上に提出を求めている教員活動重点目標・自己評価シートは、年度初めに、各教員が教員活動重点目標を設定し、年度末に自己評価を行っている。2018 年度の目標設定者は在籍教員の該当者 525 人中 509 人、自己評価提出者は目標設定者 509 人中 499 人（未提出者 8 人は退職、欠勤等により提出できない者）であった。

(2) 授業改善の取り組み

『魅力ある授業づくり』のための主な取り組みとして、以下の7つに取り組んできた。

① Webによる「学生による授業評価」「教員による授業自己評価」

2018年度、「授業評価」の学生の回答率は、春学期約35%、秋学期約20%、教員の自己評価回答率は、春学期約61%、秋学期約60%であった。学生の回答率は、2017年度春学期の約33%、秋学期の24%と比較すると横ばいであった。毎年、秋学期の学生回答率は、春学期に比べて減少という傾向は同様であった。自由記述においては、春学期3042件であり、2017年度より2.1%増加したが、秋学期は1679件であり、2017年度より4.1%減少しており、この数年減少傾向にある。一方、『授業評価の結果に対する教員コメント』については、コメント教員数が2017年度と比較して春学期で24名減少の477名、秋学期で17名増加の497名であった。さらにコメント率は、春学期は57.7%（2017年度62.5%）で減少、秋学期は61.6%（2017年度60.5%）で増加している。

授業評価の回答率については、例年同様に学科による違いが大きい点はあるが、その傾向は少なくなってきた。学部・学科としての取り組み、認識の差がまだ認められるが、少しずつ大学全体で学生への働きかけの意識が高まってきている。

② 携帯電話を活用したクリッカーシステムの提供（授業改善アンケートシステム）

携帯電話やスマートフォンを活用して、授業中に教員がネット環境を使える場所であれば、学生の反応を瞬時に把握できる本学独自のクリッカーシステムである「Cumoc（キューモ：Chubu University Mobile Clicker）」を導入して9年目となる。2011年7月には、利用の研修を行う目的で「CumocL」を整備し、同システムを活用して2013年4月に一般的なアンケートシステムとして学内に提供を開始した。また、2017年度より、それぞれの設問間のクロス集計が可能になるよう改善した。

なお、「授業改善アンケート（Cumocの利用を含む）」は、春学期83件、秋学期77件で合計160件（2017年度156件）の利用であった。

③ 授業改善ビデオ撮影支援制度

授業担当者からの希望による授業ビデオ撮影支援制度の2018年度実績は10件（2017年度11件）で、授業サロンにおける授業担当者の振り返りのための撮影10件（2017年度10件）を含んでいる。

④ 授業のオープン化制度

授業担当者に申し出ることによって、他の教員が授業を参観できるシステムであり、後述の「全学公開授業」「授業サロン」もこの趣旨を基に実施している。

⑤ 全学公開授業

「全学公開授業」を1件（2017年度2件）実施し、8人（2017年度14人）の教職員の参加があった。

⑥ 授業サロン

専門が異なる学部を越えた5人の教員による授業見学とピアコンサルティングを行う「授業サロン」が春学期1グループ、秋学期1グループ（2017年度、春学期1グループ、秋学期1グループ）実施され、授業の振り返り、また授業改善のヒントになる点などが意見交換された。今回で24グループとなり、延べで120人の専任教員が参加したこと

になる。FD ネットワークの構築に繋がり、本学の FD の特徴を表す取り組みとして定着している。

⑦ CU ルーブリックライブラリ

教育の質保証を目指す上での成績評価方法の 1 つであるルーブリックの「蓄積」から「共有」、そして「作成支援」に繋げることを目的として、2016 年 3 月に運用を始めた。2019 年 3 月までに非公開を含めて 19 件の登録があった。

(3) FD フォーラム・講演会

①第 48 回 FD 講演会「これからの大学教育に求められるもの～高大接続と大学入試改革(新入試制度)を考える」(講師：薄井道正・立命館大学教育開発推進機構教授)と②第 49 回 FD 講演会「大学の教育力を高めるには—生き残るための大学改革—」(講師：小宮一仁・千葉工業大学学長)の 2 回 FD 講演会を開催した。①はライティングをもとに国語教育の重要性に関する内容であり、すべての学問における国語力の重要性、特に高等教育以前の国語教育の重要性が示された。②は千葉工業大学の受験者数を飛躍的に高め、全国からその活動が注目される小宮学長による大学運営に関する現在の問題点とその改革案の具体例が示された。中部大学の今後を考える上でも非常に重要な内容であった。

各講演会には、124 人、112 人と多くの教職員が参加した。なお、2015 年の講演会からは、テーマに応じて県下の大学をはじめ、他の大学にも案内を行っており、学外からの参加者はそれぞれ、15 人、7 人であった。

(4) キャリアアッププログラム・FD に関連する研修会等

2009 年度から開催してきた「教員キャリアアッププログラム」は、教員の授業スキルを含めた「授業改善」に関連したプログラムはもとより、「ICT(情報技術)」「学生への対応」など幅広い目的のワークショップである。教職協同のプログラムとして、職員も参加し実施してきた現状を踏まえ、2017 年度から、「キャリアアッププログラム」と名称を変更することとなった。

2018 年度は、14 回開催した。当センター客員教授による「授業技術(話し方)(伝える力)」に関するプログラム(8 回)をはじめ、学外講師・学内講師を招いた「学生対応」プログラム(4 回)、さらに当センター教員による Cumoc 活用に関する「授業運営・ICT」プログラム(2 回)を開催した。

いずれも、本学のキャリアアッププログラムのプログラムメニューとしては充実しており、形態もシステマティックに開催している。新たに大学に赴任する教員をはじめ、繰り返し開催することで非常勤講師、職員を含めた多くの教職員が体験できるプログラムとなっている。

また、毎年行われる年度初めの新任教員説明会では、学長、教務部長、学生部長、大学教育研究センター長などから、本学の建学の精神、大学理念、本学の FD 活動等を説明している。

キャリアアッププログラムの参加者に非常勤講師が多いことも本学の特徴である。

(5) FD カフェ

FD カフェは、教職員による自由な意見交換の場である。大学教育に関するさまざまなテーマ、学生と直面している必要な知識などの実践的なテーマに関して自由に意見を交わすことで情報やスキルを共有する場を提供することを目的として開催されている。2018年度は春学期1回(2017年度2回)、秋学期1回(2017年度2回)の計24回開催された。そのうち、第1回は、新任教員向けに大学内における疑問解決のための情報交換として、春学期冒頭に開催された。第2回は、グループディスカッションをより活性化させる方法について情報交換する主旨で開催した。

(6) 出版物

『教育・研究活動に関する実態資料』及び『中部大学教育研究』を刊行している。前者は、様々な基礎データを集約し、学内各種制度や対外的な申請や審査の基礎資料として、また大学の情報公開のための基礎資料として活用されている。後者は、1979年より刊行されてきた『教育資料』を充実させ、新時代の大学教育の理念・手法・改善策などを論じ合う場を提供するものとして、教育改善・質的向上に役立てることを目的に2001年から刊行している。教員の情報共有の場ともなっており、特に研究論稿は教育研究の分野でも数多く引用される実績を有している。『中部大学教育研究』No.17から論文の投稿区分を見直し、要約・キーワード・英文タイトル等の追加、およびレイアウトの変更と、編集・投稿要項を改訂した。2018年度は、No.18として発行した。一般投稿9編と『魅力ある授業づくり』を重点目標に定めて10年を経て、今まで推進してきたFD活動(各種FDプログラム)について、2013年度から2017年度までの5年間の実践と振り返りをまとめ掲載した。また、センター教員および大学教育研究センター客員教授の協力を得て「授業評価アンケート結果から見るFD研修の効果」について検証がなされ、研究論文として大学教育学会誌において掲載された。

(7) 教育活動顕彰制度

2008年度より学部における評価項目の重みを増加し、また個人だけでなく団体、グループに対しても表彰できる特別賞を取り入れた「教育活動顕彰制度」を導入し、毎年前年度の教育活動について表彰しており、2017年度の「教育活動優秀賞」は10人(2016年度17人)、「教育活動特別賞」は、1グループ(2016年度は2人)が受賞する結果となった。実施要項、選考総評等はHPで公開されている。また、2017年度に、中部大学教育活動顕彰制度における教育活動優秀賞の4回目の受賞者に対して教育活動金虎賞(きんとらしょう)を制定しているが、まだ対象者は出ていない。

(8) 『魅力ある授業づくり』プログラム

すべての教員(特に教育歴の少ない教員や新たに本学に赴任する教員)が持続的に教育力の向上を目指すことを奨励し、FDプログラムへの積極的な参加を奨励するために、FD委員会が主催しているFDプログラムを活用して規定の要件を満たしたものに対して、本プログラムの修了証を授与している。修了の要件については、リーフレットやHP上で公開されており、3年間の間に授業サロンまたは全学公開授業実施を必須としたポイント制をとってい

る。2018年度には6人の教員に修了証を授与した。本学の特徴あるFDプログラムへのさらなる積極的な参加を促すきっかけになることが期待される。

(9) FD オンデマンド講義（全国私立大学FD連携フォーラム実践的FDプログラム）

FD オンデマンド講義は、本学が加盟している全国私立大学FD連携フォーラムが運営している実践的FDプログラムを活用したものである。同プログラムは、毎年4月に視聴希望者を募り、教員が自らの授業を専門分野と教育学の観点から省察できる知識、技能、態度、アクティブ・ラーニングを実践する能力を修得するプログラムである。2018年度は個人25人、1組織（2017年度個人30人）が受講した。引き続き、啓発の機会として活用されることが期待される。

4. 2 学部・研究科での取り組み

各学部・各研究科においてFD活動評価点検報告書が作成されており、ここには提出された報告書から2018年度の学部・研究科・学科でのFD活動の特記すべき事項を（1）授業・教授法の改善に関する取り組み（2）研究交流を通じた教員の資質向上の取り組み、の2つの目的別にまとめた。

(1) 授業・教授法の改善に関する取り組み

- ① 研修会・懇談会の開催（人文学部・現代教育学部／教育学研究科・人間力創成総合教育センター）
- ② 講演会・報告会の開催（工学部・国際関係学部・人文学部・国際人間学研究科・応用生物学部・生命健康科学部／生命健康科学研究科・現代教育学部／教育学研究科・人間力創成総合教育センター）
- ③ ワークショップ・セミナーの開催（工学部・応用生物学部・生命健康科学部／生命健康科学研究科・人間力創成総合教育センター）

(2) 研究交流を通じた教員の資質向上の取り組み

- ① 研修会・懇談会の開催（工学部・経営情報学部・人文学部・生命健康科学部／生命健康科学研究科・現代教育学部／教育学研究科・人間力創成総合教育センター）
- ② 講演会・報告会の開催（工学部・国際関係学部・人文学部・国際人間学研究科・応用生物学部・生命健康科学部／生命健康科学研究科・現代教育学部／教育学研究科）

本年度は、大学全体で開催されるFD活動への取り組みは昨今の流れと同様に高まっているが、それと同時に、各学部・研究科における背景に応じてオリジナルの活動が増えていた。学部によっては事業の開催数は昨年比で減少しても、新たな取り組みを始めたり、強化したりしたところもみられた。また、ほとんどの学部、研究科で講演会やワークショップを独自に開催しており、広くFD活動が普及していると考えられる。

4. 3 2018年度のFD活動の取り組みの傾向

2018年度の本学のFD活動の目的別、対象別、内容形式別にまとめたのが次の3つの表である。2013年度以降、「会議」や「打ち合わせ」はデータから除外している。

目的別にみたFD活動の件数は近年に大きく増加している。これは表2.3を参照すると確かに開催件数自体は2017年、2016年より相当増加しているが、2015年と同数である。つまり、一つの企画において、様々な目的を持たせるように考慮された企画が増えたことを意味する。内容の充実化が図られた結果とも考えられる。近年の各学部、研究科でのFD活動の高まりが量だけでなく、質的にも向上してきていることがうかがわれる。

対象別にみても「学部・研究科対象」が倍近く増加しており、このことも独自開催が盛んになっている表れであろう。また、対象ごとにバランス良く開催されている。

形式別にみれば、講演・報告会が大幅に増加しており、教育活動顕彰制度の受賞者の報告会なども定常化している。また、ワークショップ・セミナーも2017年度まで漸減していたが、2018年度は最も多く、グループワークなどの実践形式のFD活動がより活発になっており、知識の修得のみならず、経験することで資質向上を期待する傾向にあると考える。

表 2.1 目的別にみたFD活動（件数）

| 目的 | 2018年度 | 2017年度 | 2016年度 | 2015年度 |
|----------------|--------|--------|--------|--------|
| 授業・教授法の改善 | 72 | 66 | 57 | 67 |
| 教員資質向上のための研究交流 | 74 | 39 | 49 | 57 |
| FD活動企画・運営 | 16 | 16 | 13 | 20 |
| | 162 | 121 | 119 | 144 |

表 2.2 FD活動の対象別にみたFD活動（件数）

| 対象 | 2018年度 | 2017年度 | 2016年度 | 2015年度 |
|----------------------|--------|--------|--------|--------|
| 全学対象 | 46 | 47 | 49 | 59 |
| 学部・研究科対象 | 39 | 23 | 23 | 21 |
| 学科・教育科対象 | 45 | 26 | 17 | 36 |
| | 130 | 96 | 89 | 116 |
| * 表 2.2 のうち、非常勤講師を含む | 51 | 40 | 39 | 45 |
| * 表 2.2 のうち、学生を含む | 46 | 21 | 14 | 24 |

表 2.3 形式別にみた FD 活動（件数）

| 内容形式 | 2018 年度 | 2017 年度 | 2016 年度 | 2015 年度 |
|--------------|---------|---------|---------|---------|
| 研修会・懇談会 | 28 | 21 | 32 | 31 |
| 講演・報告会 | 63 | 44 | 42 | 62 |
| ワークショップ・セミナー | 26 | 16 | 23 | 25 |
| 制度・システムなど | 16 | 19 | 15 | 15 |
| | 133 | 100 | 112 | 133 |

※ 上記の 3 表の合計件数は、重複項目があるため、一致しない。

5. FD 活動に関する課題と今後の計画

2017 年度で『魅力ある授業づくり』の重点目標を掲げてから 10 年が経過し、次の段階に入ってきたことが様々なデータからうかがえる。FD 活動への意識は各学部、研究科等の組織に浸透し、実際に組織で個別の活動が増えてきた。このことは、「3. 2018 年度の FD 活動の重点目標」にも表れており、記載内容がより充実し、具体性も出ており、全体的なボリュームが増えている。各組織の取り組みの充実の表れであろう。

一方、大学全体の企画の中には漸減しているものも出てきた。特に全学公開授業は、実施希望者の人数が減っており、課題の 1 つと考える。今後、各種企画広報において、その趣旨や効果の程を分かりやすく伝えていく必要がある。また、全体の「量」が増加していること自体は望ましい傾向ではあるが、次の 10 年を展望すると「質」の向上が課題となる。『魅力ある授業づくり』をはじめ、教育の質を高めるためにも、FD 活動プログラムの質をさらに吟味していく必要があると考える。

新たな時期を迎えるが、今後の計画としては、教員のみならず大学職員も大学を構成する重要な一員としての資質向上を目指した FD・SD 活動を視野に入れた積極的な取り組みが必要になる。そして、教育の質保証のためにルーブリック評価等の活用を推し進め、各種アセスメントに関する教職員意識の啓発を進めていく。